

(様式1)

No. 2201

業務実績書

中期計画の項目 (I5 (1))	文化財の保護制度や施策の国際動向及び国際協力等の情報を収集、分析して活用するとともに、国際共同研究を通じて保存修復事業を実施するために必要な情報収集を行う。また、国内の研究機関間の連携強化や共同研究、研究者間の情報交換の活発化、継続的な国際協力のネットワークを構築し、その成果をもとにアジア諸国に於いて文化財の保存修復事業を推進する。
---------------------	---

【事業名称】	文化財保存施策の国際的研究 (I5 (1) ①)
--------	--------------------------

【事業概要】	日本国内における文化財保護政策・施策の充実に、また日本が行う国際協力事業の円滑な実施に必要とされる、文化財の概念やその保護の理念、保護のための各種施策に関する国際情報を収集し分析、報告する。また文化遺産に関する国際ワークショップを国内外で開催してこれら情報の共有の場を提供することにより専門家国際ネットワークの構築を図り、文化遺産分野での日本の国際貢献、日本からの情報発信に寄与する。これらの事業により得た国際情報は、国際情報データベースに蓄積、また国際資料室に配架して公開する。
--------	--

【担当部課】	文化遺産国際協力センター	【事業責任者】	国際企画情報研究室長 稲葉信子
--------	--------------	---------	-----------------

【スタッフ】	清水真一、岡田健、山内和也、朽津信明、二神葉子、芹生春菜、江草宣友、廣野幸、今井健一朗、谷口陽子、宇野朋子、岩出まゆ、有村誠、影山悦子（以上、文化遺産国際協力センター）、前田耕作、ウーゴ・ミズコ（以上、客員研究員）
--------	---

【年度実績概要】	<p>1. 文化財保存施策に関する国際情報の収集・分析、活用              本年度は、自然保護との連携がよく進み、独自の取り組みを進めていると考えられる北欧を対象に調査を行った。国内において資料収集、分析を行うほか、ノルウェー、スウェーデン、フィンランドから専門家を招聘して、これらの国における文化財保護の現状と問題点、今後の方針、環境・自然保護関係省庁との連携、都市計画・農林水産・開発関係省庁との連携、国際協力などについて情報交換を行うほか、日本の文化財保護の現場を訪問して日本人専門家との意見交換の機会を提供した。環境保全、特に地球温暖化問題についての取り組みがこれら各国の主要な政策課題となる中で、文化遺産保護分野がこれにどのように対処しているかについて貴重な情報が入手できた。</p> <p>2. 文化遺産国際ワークショップの開催              アジア文化遺産国際会議：中央アジアの専門家をウズベキスタン共和国に招聘し、「中央アジアの文化遺産と日本の貢献」をテーマとした専門家会議を開催した（日時：2008年3月12～16日、場所：タシュケント市及びサマルカンド市）。</p> <p>国際文化財保存修復研究会：上記会議が外国人専門家・機関を主たる参加者として国際的な連携の構築を目指しているのに対し、本研究会は、日本国内への国際情報の発信と、国際協力に関する国内専門家の情報交換・連携強化を目的として国内向け一般公開の研究会として開催している。本年度は、「保存処置後のモニタリング」をテーマに開催した（日時：2007年12月6日、場所：東京文化財研究所セミナー室）。</p>
----------	--

【実績値】	<p>国際ワークショップ開催件数： 2件              報告書刊行件数： 2件 (①, ②)              外国人招へい者数： アジア文化遺産国際会議：9人 国際文化財保存修復研究会：2人              国際ワークショップのうち一般公開分（国際文化財保存修復研究会）参加者数： 93人              国際ワークショップのうち一般公開分（国際文化財保存修復研究会）参加者満足度： 100%</p>
-------	---

【備考】	<p>①国際文化財保存修復研究会報告書「保存処置後のモニタリング」08.03              ②「Strategy Development &amp; Needs Assessment」08.03</p>
------	---

(様式2)

自己点検評価調書

No. 2201

1. 定性的評価

観 点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判 定	A	A	A	A	A	A
備考						

2. 定量的評価

観 点	ワークショップ 開催件数	参加者数	満足度	報告書刊行件数		
判 定	A	A	A	A		
備考						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	文化財保存施策に関する調査研究事業は予定通り終了し、日本の文化財保護施策の策定に有効な情報を収集し、国際情報データベースの充実に貢献した。国際・国内ワークショップも所定の成果をあげ、国際情報の交換、専門家ネットワークの構築、国内外への情報発信に貢献した。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	調査研究、国際・国内ワークショップとも、これまでの成果をもとに、それらを着実に発展させる形で実現できたと考える。調査研究については、今後もこのペースを維持しつつ事業を進め、国内の文化財保護施策の充実に貢献する。国際ワークショップについては今後とも国際的に時宜を得たテーマの開発に力を注ぎ、専門家ネットワークの構築、国内外への情報発信に貢献する。

(様式1)

No. 2202

業務実績書

中期計画の項目 (I5 (1))	文化財の保護制度や施策の国際動向及び国際協力等の情報を収集、分析して活用するとともに、国際共同研究を通じて保存修復事業を実施するために必要な情報収集を行う。また、国内の研究機関間の連携強化や共同研究、研究者間の情報交換の活発化、継続的な国際協力のネットワークを構築し、その成果をもとにアジア諸国に於いて文化財の保存修復事業を推進する。
---------------------	---

【事業名称】	アジア諸国における文化遺産を形作る素材の劣化と保存に関する調査研究 (I5 (1) ②ア)
--------	---

【事業概要】	アジア諸国では、煉瓦、土、石など、各地の遺跡に共通して用いられている材料が認められる。本研究では、地域で区切って研究を行うのではなく、各文化財に共通して用いられている素材を調査・研究することから、その素材で形作られた多くの文化財の保存修復に寄与することを目的とする。具体的には、材料の物性とその劣化に関する基礎的な研究を行うことから、それぞれの材料が劣化しにくい条件を考察し、材料に対して、あるいは遺跡の環境に対して、材料劣化を起こしにくい条件を与えることで、文化財の保存修復に貢献する。
--------	--

【担当部課】	文化遺産国際協力センター	【事業責任者】	主任研究員 朽津信明
--------	--------------	---------	------------

【スタッフ】	清水真一、二神葉子、宇野朋子（以上、文化遺産国際協力センター）、銚井修一（客員研究員）
--------	---

【年度実績概要】	<p>素材の劣化に関する基礎的研究として、表面粗さ計を開発し、屋外において文化財が劣化した場合に表面に形成される凹凸が、どの程度であるかを定量化できるシステムを確立した。また、エコーチップ試験器を用いて石材の硬さを計測する方法を確立し、石材の表面がどの程度弱っているかを定量化できるようにした。さらに接触角計を用いることにより、合成樹脂を用いて石材を撥水処理した場合の、得られる撥水効果を定量的に評価する方法を確立した。</p> <p>こうした基礎研究を受けて、カンボジア・アンコール遺跡群のタ・ネイ遺跡において、砂岩の表面に蘚苔類が繁茂する部分とそうでない部分の石材の劣化状況を系統的に調査し、蘚苔類が繁茂する部分はそうでない部分に比べて表面硬度が低下していることを明らかにした。このことから、蘚苔類が繁茂しにくいような環境を遺跡に与えることが、遺跡保存には有効な可能性が指摘された。また、タイ・スコタイ遺跡においては、遺跡の撥水処理を行う際に、得られる効果に表面粗さの違いがどのように影響を与えるかに関する現地実験を開始した。これにより、石材の撥水処理を行う際の適切な下準備の行い方や、処理を一度行った後に、次に再処理を行う必要が生じるまでの期間などについて、適切に言及できるようになると期待される。さらに、タ・ネイ、スコタイ両遺跡において、遺跡周辺の温度・湿度・風速・風向・日射などの各種環境データを計測し、それぞれの遺跡において生物繁茂に影響を与える気象条件について解析した。その結果、生物繁茂に日射は必要であるが、東南アジアの通常環境では、日射が大きい方が水分蒸発が盛んとなるため水分不足を生みやすく、一般に日射が少ない方が生物繁茂が顕著な傾向が認められた。こうした解析が、遺跡で今後適切に生物繁茂を軽減していく方向を検討することに貢献すると期待される。</p>
----------	--

【実績値】	<p>報告書刊行 1冊 (①)          論文掲載数 2編 (②、③)          学会発表数 3件 (④、⑤、⑥)</p>
-------	---

【備考】	<p>①『アジア諸国における文化遺産を形作る素材の劣化と保存に関する調査・研究 平成19年度成果報告書』08.03          ②朽津信明「茨城県つくば市周辺の中世石造美術の硬さについて」『考古学と自然科学』56 pp.1-11 07.12          ③朽津信明「カンボジア・タ・ネイ遺跡における蘚苔類の繁茂と砂岩の風化」『保存科学』47 pp.111-120 08.03          ④朽津信明、宇野朋子「石造五輪塔表面の生物繁茂と環境条件との関係について」日本文化財科学会第24回大会 奈良教育大学07.6.3          ⑤朽津信明、二神葉子「風化に伴う岩石表面の凹凸状態の計測」日本応用地質学会平成19年度研究発表会 大阪市立大学07.10.11          ⑥銚井修一・宮内真紀子・宇野朋子・小椋大輔・川本伸一「スコタイ遺跡における仏像の保存に関する研究 その2 含水率変動の影響を考慮した藻類の成長モデルの作成」日本建築学会大会 福岡大学 07.08</p>
------	---

(様式2)

自己点検評価調書

No. 2202

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	
備考						

2. 定量的評価

観点	報告書刊行数	論文掲載数	学会発表数			
判定	A	A	A			
備考						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	報告書刊行、論文数、学会発表件数ともに、計画通りの数字が得られたことからAと判断した。また、順調にデータが蓄積されていることから、次年度にも同等の成果が期待される。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	当初の計画通り、順調にデータが蓄積されている。次年度以降もさらに継続してデータを増やす予定である。

(様式1)

No. 2203

業務実績書

中期計画の項目 (I 5 (1))	文化財の保護制度や施策の国際動向及び国際協力等の情報を収集、分析して活用するとともに、国際共同研究を通じて保存・修復事業を実施するために必要な研究基盤整備を行う。また、国内の研究機関間の連携強化や共同研究、研究者間の情報交換の活性化、継続的な国際協力のネットワークを構築し、その成果をもとにアジア諸国において文化財の保存・修復事業を推進する。
----------------------	---

【事業名称】	アンコールワット遺跡群西トップ寺院の調査 (I 5 (1) ②ア)
--------	-----------------------------------

【事業概要】	カンボディア王国アンコール遺跡群において、現地のAPSARA機構と共同研究を行い、文化遺産の保護と人材育成に貢献する。
--------	---

【担当部課】	飛鳥資料館	【事業責任者】	学芸室長・杉山洋
--------	-------	---------	----------

【スタッフ】	肥塚隆保、高妻洋成、降幡順子、豊島直博、和田一之輔、林正憲、石村智、窪寺茂、島田敏男、清水重敦 (企画調整部、文化遺産部、都城発掘調査部、埋蔵文化財センター)
--------	--

【年度実績概要】	<p>平成18年度から新たな中期計画に基づき西トップ寺院を対象とした共同研究を継続した。</p> <p>本年も第二次5カ年計画に沿って、アンコール・トム内西トップ寺院で調査を行った。まず6月18日から21日までユネスコ主催の第16回国際調整委員会技術委員会に出席し、森本氏と現地調査員ソパナラ氏が発表を行った。今年度から各国の調査団の活動は事前に小冊子としてまとめられより詳細にそれぞれの調査成果を知ることができるようになった。7月3日から7日まで安田センター長と岡村企画調整部長を現地にご案内し、今後の調査計画や事業の進め方についてご指導を頂戴した。今年度最初の調査は7月17日～27日に豊島氏と石村氏のご協力で行った。今年度から中央祠堂群の地下構造の把握を目的として、中央祠堂の周囲にトレンチを入れた。7月の調査では中央祠堂北西に東西方向のトレンチを設定した。今度の調査によってははっきりとした掘り込み地形は確認されず、上下2層の整地土層を確認した。8月15日から2日間には、文部科学省副大臣池坊保子副大臣と、青木保文化庁長官、佐々木丞平理事長を現地にご案内し、西トップ寺院などの現状と今後についてご説明した。11月26日から28日まで現地で第17回国際調整委員会が開催され、当研究所の活動を紙上報告した。12月には17日から27日まで本年度第2回目の現地調査を林氏と石村氏のご協力によって行った。今回は西トップ寺院中央祠堂の北東に南北方向のトレンチを入れ、当該地区における中央祠堂群の地下構造について調査を行った。その結果、7月の調査と同様の2層の整地層が確認され、前回の調査と同様な状況が確認された。調査成果の詳細については『奈良文化財研究所年報2008』を参照願いたい。この調査に併行して科学研究費補助金によるソサイ窯跡の調査も行い、上記両氏のご協力を得て窯体の検出を行った。12月には森本氏によって西トップ寺院のフランス所蔵資料の調査が行われた。</p> <p>1月21日から26日には建築班として島田氏と清水氏にご参加いただいた。西トップ寺院における図面の作成と、今後の建築班調査の方向性について意見交換を行った。2月には大阪大谷大学の中村浩教授を中心とする調査団によるクナ・ポー窯跡調査に協力すると共に、プノンペンにおいて在プノンペン日本大使館を訪れ、当研究所の諸事業への理解と協力を要請した。3月7日から12日には山田文化財情報課長に現地をご視察いただき、今後における当該事業の情報発信のあり方や、飛鳥資料館企画展示におけるカンボジア事業の紹介に関する調整を行った。</p> <p>本年は以上のような調査研究活動を行ったが、特筆すべき外部からのご協力があった。高松塚古墳の石室解体で研究所事業にご協力いただいた(株)タダノと飛鳥建設株式会社からカンボジア事業へのご協力の申し出があり、1月31日に(株)タダノ志度工場において、調査用車両3台の贈呈式が挙行された。当該車両は2008年4月には現地に到着の予定で、本車両を使用することによって、調査研究活動が飛躍的に進展すると共に、今後の事業展開にも多大の貢献が予想される。</p>
【実績値】	発表件数：2件 (①～②)

【備考】	<p>①国際調整委員会 ソキメック ホテル 2007.6.18-21</p> <p>②国際調整委員会 ソキメック ホテル 2007.11.26-28</p>
------	--

(様式2)

## 自己点検評価調書

No. 2203

## 1. 定性的評価

観 点	適時性	独創性	発展性	継続性		
判 定	A	A	A	A		
備考						

## 2. 定量的評価

観 点						
判 定						
備考						

## 3. 実績の総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	今年度も当初予定した調査予定を寿雲頂に進行することができるとともに、中央塔に関する様々な事実を明らかにすることができた。招聘事業も確実に進行し、相手国文化財保護機関からも一定の評価を得ることができた。以上の進捗状況を総合的に判定してAとした。

## 4. 当年度における中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	本年度の計画を当初の予定とおり遂行したことから、当事業は順調であると判定した。

(様式1)

No. 2204

業務実績書

中期計画の項目 (I5 (1))	文化財の保護制度や施策の国際動向及び国際協力等の情報を収集、分析して活用するとともに、国際共同研究を通じて保存修復事業を実施するために必要な情報収集を行う。また、国内の研究機関間の連携強化や共同研究、研究者間の情報交換の活性化、継続的な国際協力のネットワークを構築し、その成果をもとにアジア諸国に於いて文化財の保存修復事業を推進する。
---------------------	---

【事業名称】	龍門石窟及び陝西省唐代陵墓石彫像の保存修理に関する調査研究 (I5 (1) ②イ)
--------	---

【事業概要】	中国龍門石窟の保存に協力するため、龍門石窟研究院との緊密なパートナーシップを構築し、龍門石窟の現状を詳細に調査し、保存修復の方法についての研究と具体的な処置、人材の養成などを実施する。陝西省所在の唐時代の乾陵、橋陵、順陵に附属する石彫像の保存修理に関して、科学的研究と保存修理作業を行うと共に、石彫像保存地区の保存計画策定の研究を行う。
--------	--

【担当部課】	文化遺産国際協力センター	【事業責任者】	保存計画研究室長 岡田健
--------	--------------	---------	--------------

【スタッフ】	清水真一、朽津信明、谷口陽子、杉崎佐保恵（以上、文化遺産国際協力センター）
--------	---------------------------------------

【年度実績概要】	<p>1) 龍門石窟人材養成              11月19日から12月16日の日程で、龍門石窟研究院保護センター高東亮研究員と李建厚研究員の2名を招へいし、石質文化財の修理技術、撥水材料を塗布した後の効果の評価方法、修理作業終了後の環境のモニタリングなどについて、東京文化財研究所保存修復科学センターの研究員をはじめ、西浦忠輝氏（国土館大学教授）、沢田正昭氏（国土館大学教授）、山路康弘氏（別府大学客員研究員）など外部専門家による講義を行い、大阪城石垣修復現場、福島県入水三十三観音摩崖仏、神奈川県箱根石仏、修理施行会社の工場を視察させ、周到な内容による研修を実施した。最後に成果報告書をまとめ、研修を終了した。</p> <p>2) 石造文化財の保存修復に関する研究会の開催              西安文物保護修復センターと共同で「石造文化財の保存処理技術に関する研究会—石造文化財の保存修復と展示方法/保存処置に際しての接合部分及び表面の化粧方法」をテーマとし、日中専門家による研究会を開催した。              日中双方の保護修復、地質、考古学などの専門家20人以上が参加し、西安文物保護修復センターの研究員による作業報告と、国内外での石造文化財修復に豊富な経験を持つ海老澤孝雄氏（(株) ゴエトス）の事例報告を聞き、参加者による討論と意見交換を行った。龍門石窟研究院石窟保護センターの研究員2名が西安市に出張し、参加した。</p> <p>【主催】 東京文化財研究所・西安文物保護修復センター              【日程】 平成19年10月11日～13日（3日間）              第1日（11日） 乾陵視察              第2日（12日） 研究会              第3日（13日） 秦兵馬俑坑、漢陽陵地下博物館視察</p> <p>【研究会内容】              1) プロジェクト報告              「順陵石彫像の整備作業について」（西安文物保護修復センター 李衛）              「乾陵西門獅子像の復元修復作業について」（西安文物保護修復センター 甄剛）              2) 事例報告              「石造文化財の保存修復と展示方法」（海老澤孝雄）              「保存処置に際しての接合部分及び表面の化粧方法」（海老澤孝雄）</p>
【実績値】	研究会の開催 1回 (①)

【備考】	①研究会資料集 07.10.11-13
------	---------------------

(様式2)

自己点検評価調書

No. 2204

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	
判定	A	A	A	A	A	
備考						

2. 定量的評価

観点	研究会開催					
判定	A					
備考						

3. 実績の総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	毎年段階的に研究テーマを発展させており、着実に成果を上げているため、Aと判定した。龍門石窟、陝西省で実施されている石造文化財保存修理事業はともに次年度が最終年度となり、今年度の研究の成果が現場で発揮されることが期待できる。龍門石窟研究院と西安文物保護修復センターの研究交流もさらに促進されつつある。

4. 当年度における中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	その進捗度、従来水準を維持しつつ比較的堅調に実現できたと考える。

(様式1)

No. 2205

業務実績書

中期計画の項目 (I5(1))	文化財の保護制度や施策の国際動向及び国際協力等の情報を収集、分析して活用するとともに、国際共同研究を通じて保存修復事業を実施するために必要な情報収集を行う。また、国内の研究機関間の連携強化や共同研究、研究者間の情報交換の活発化、継続的な国際協力のネットワークを構築し、その成果をもとにアジア諸国に於いて文化財の保存修復事業を推進する。
--------------------	---

【事業名称】	敦煌壁画の保護に関する共同研究 (I5(1)②イ)
--------	---------------------------

【事業概要】	敦煌壁画に関して、敦煌研究院と共同で調査研究を行う。これは、近年のシルクロード各地における各国・各研究機関の専門家による壁画を中心とした文化財研究の進展を念頭に置きつつ、壁画の制作材料と技法を古代のシルクロードを通じた文化交流、技法・材料の移動という観点から研究し、敦煌壁画を総合的に理解しようとするものである。具体的な研究項目としては、1)壁画制作技法・制作材料に関する光学的方法及び分析的方法を用いた総合研究、2)放射性炭素年代測定法による主要窟の年代同定に関する研究、3)日中の若手研究者育成、を実施している。
--------	--

【担当部課】	文化遺産国際協力センター	【事業責任者】	保存計画研究室長 岡田健
--------	--------------	---------	--------------

【スタッフ】	山内和也、朽津信明、谷口陽子、宇野朋子、高林弘実、大竹秀実、津村宏臣（以上、文化遺産国際協力センター）、舛井基充（実践女子大学）、中村俊夫（名古屋大学）、齋藤努（歴史民族博物館）
--------	---

【年度実績概要】	<ol style="list-style-type: none"> <li>1) 合同調査：5月14日～6月7日の日程で、前年度に引き続き第285窟東壁・北壁・天井の壁画に対する写真撮影による光学調査、第268・272・275窟からの<sup>14</sup>C年代測定に供する試料17点の採取を行った。</li> <li>2) 初期窟の光学調査：6月26日～6月28日の日程で、第285窟の材料・技法の特徴の位置づけを莫高窟初期壁画の中で明確にするためのデータを得ることを目的として、莫高窟に現存する最古の洞窟とされる第272・275窟壁画の一部について、敦煌研究院保護研究所のメンバーが光学調査を行った。</li> <li>3) 合同調査：8月19日～9月14日の日程で、第285窟正壁・南壁を対象として肉眼観察によって確認できる亀裂・剥落といった物理的損傷を記録することを主眼とした壁画の保存状態の調査、第285窟壁画に使用されている色料についてのデジタル顕微鏡・携帯型蛍光X線分析装置・携帯型ラマン分光計を用いた非接触分析調査、さらに詳細な分析研究を行うための微小試料の採取を行った。</li> <li>4) 合同調査：12月9日～14日の日程で、第285窟北壁の題箋部分の紫外線蛍光写真撮影、第285窟内部の測量を行った。敦煌研究院が実施した地理情報システムGISに関する研究会に参加し、敦煌莫高窟の保護におけるGISの活用に関する研究を行った。この成果をもとに、敦煌研究院保護研究所王小偉研究員の研修プログラムを作った。</li> <li>5) 敦煌派遣研修：5月14日～9月15日の日程で、日本から大学院博士後期課程在籍の学生3名を敦煌に派遣した。</li> <li>6) 敦煌研究員の来日研修：1月15日～3月8日の日程で、王小偉研究員・李燕飛研究員の2名が来日し、研修を実施した。王研究員は、同志社大学文化情報学部及び東京文化財研究所において、同志社大学文化情報学部津村宏臣専任講師（東京文化財研究所客員研究員）の指導のもと、地理情報システムGISの研修を受けた。李研究員は、国立歴史民俗博物館において、齋藤努准教授の指導のもと、鉛同位体比分析の研修を受けた。</li> <li>7) 報告書の作成：東京文化財研究所と敦煌研究院両者共同の2007年度成果報告書を編集し、発行した。</li> </ol>
----------	---

【実績値】	報告書 1冊 (①)
-------	------------

【備考】	①報告書「敦煌壁画の保護に関する日中共同研究 2007」08.3 159p
------	---------------------------------------

(様式2)

自己点検評価調書

No. 2205

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
備考						

2. 定量的評価

観点	報告書作成					
判定	A					
備考						

3. 実績の総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	シルクロード沿線の壁画研究が注目される中、近年開発が進んでいる可搬型観測機器の導入、積極的な外部研究機関との連携などが実現し、調査による新たな発見に基づく研究方法の改善、科学的分析手法の確立も順調に行われているため、Aと判定した。敦煌研究院との研究者同士の意思疎通も順調に図られていて、研究の一層の発展が期待できる。

4. 当年度における中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	これまでの経験を生かしつつ、堅調に実現できたと考える。研究の進展とともに研究項目が増えており、人員配置、報告書への反映の仕方など、改善すべき点を見直しつつ、次年度へ向けて順調に作業を進めている。

(様式1)

No. 2206

業務実績書

中期計画の項目 (I5 (1))	文化財の保護制度や施策の国際動向及び国際協力等の情報を収集、分析して活用するとともに、国際共同研究を通じて保存修復事業を実施するために必要な情報収集を行う。また、国内の研究機関間の連携強化や共同研究、研究者間の情報交換の活発化、継続的な国際協力のネットワークを構築し、その成果をもとにアジア諸国に於いて文化財の保存修復事業を推進する。
---------------------	---

【事業名称】	西アジア諸国等文化遺産保存修復協力事業 (I5 (1) ②ウ)
--------	---------------------------------

【事業概要】	西アジア諸国の文化財の保護・保存・修復に関する協力・支援事業の一環として、とくに内戦・紛争によって破壊の危機にさらされているアフガニスタン及びイラクの文化財の調査研究を行い、それに基づいて文化財保護支援事業の優先順位を定め、破壊された文化財の保存・修復事業を通して、関連する分野の技術移転を図るとともに、当該国から強い要請を受けている人材育成を行い、自国民の手による文化財保護事業の確立の支援を目指す。また、あわせて周辺地域（特に中央アジア）の文化財の調査研究を実施する。
--------	--

【担当部課】	文化遺産国際協力センター	【事業責任者】	センター長 清水真一
--------	--------------	---------	------------

【スタッフ】	稲葉信子、山内和也、朽津信明、岩出まゆ、宇野朋子、谷口陽子、有村誠、影山悦子（以上、文化遺産国際協力センター）、前田耕作、岩井俊平、西山伸一（以上、客員研究員）、岡村道雄、井上和人、窪寺茂、森本晋、石村智、脇谷草一郎（以上、奈良文化財研究所）、中村俊夫（名古屋大学）、金原正明（奈良大学）、佐々木達生、佐々木花江（以上、金沢大学）、野上建紀（有田町歴史民俗資料館）、木口裕史、中野広行（以上、株式会社パスコ）、島馨、馬貴臣（以上、応用地質株式会社）
--------	--

【年度実績概要】	<p>1. アフガニスタン（バーミヤーン）</p> <p>1-1. 第8次ミッション派遣（2007年6月9日～7月15日）</p> <p>①アフガニスタン専門家研修事業：ワークショップの開催（6月25日～30日）及び現場での共同作業を通じての人材育成・技術移転。</p> <p>②バーミヤーン遺跡の考古学的調査：文化的及び考古学的地区と保護されるべき考古遺跡を特定し、保護するためにガリーブ・アーバード地区及びガーズィー・ダウーティー地区の4つの調査区で試掘調査、そして、カクラク谷の中上流で分布調査を実施した。</p> <p>③バーミヤーン地域の古環境の復元のための調査（金原正明・奈良大学教授との協力）</p> <p>④外部機関・団体との共同研究：バーミヤーン遺跡保存事業を円滑かつ効率的に実施するために下記の4機関と共同研究を実施。</p> <p>④-1. 金沢大学との共同研究：バーミヤーン遺跡出土陶器の研究</p> <p>④-2. 株式会社パスコとの共同研究：バーミヤーン石窟遺構の現状記録調査のための研究</p> <p>④-3. 株式会社応用地質との共同研究：バーミヤーン遺跡保存のための崖崩壊予測および地下探査に関する研究</p> <p>④-4. 名古屋大学年代測定総合研究センター：バーミヤーン仏教壁画の年代測定</p> <p>⑤バーミヤーン仏教壁画の保存：I窟、N(a)窟における保存修復作業を実施</p> <p>1-2. 「バーミヤーン遺跡保存に関する第6回専門家作業グループ国際会議及び国際シンポジウム」開催（ユネスコと共催）及び参加</p> <p>1-3. 『アフガニスタン文化遺産調査資料集』の出版</p> <p>2. イラク文化財専門家研修事業：バグダード国立博物館等から専門家1名を日本に招へいし、ユネスコ日本信託基金による人材育成プロジェクトとタイアップして東京・奈良文化財研究所、静岡県埋蔵文化財調査研究所で、木製品の保存修復の理論と実践に関する研修を実施。</p> <p>3. タジキスタン：タジキスタン共和国科学アカデミー歴史・考古・民俗学研究所と文化遺産の保護に関する合意書締結（2008年3月10日）。</p>
----------	--

【実績値】	<p>招へい専門家：1名</p> <p>派遣職員数：12名</p> <p>報告書作成：6件（①～⑥）</p> <p>学会発表件数：1件（⑦）</p> <p>ワークショップ開催：1件</p>
-------	--

【備考】	<p>①概報第2巻『バーミヤーン遺跡保存事業概報—2006年度（第6・7次ミッション）—』</p> <p>②同英語版『Preliminary Report on the Safeguarding of the Bamiyan Site 2006 —6th and 7th Missions—』</p> <p>③概報第3巻『バーミヤーン仏教石窟調査概報—2006年度—』</p> <p>④別冊第2巻『アフガニスタン・カーブル市南部の文化的記念物および考古遺跡の調査』</p> <p>⑤同英語版『Documenting the Cultural Heritage of Kabul, Survey Project in the Kabul Region Afghanistan funded by UNESCO in 2006』</p> <p>⑥別冊第3巻『バーミヤーン遺跡保存のための環境調査報告—2005～2006年—』</p> <p>⑦山内和也、有村誠 アフガニスタン、バーミヤーン遺跡保存事業—2007年度の成果— 『平成19年度考古学が語る古代オリエント 第15回西アジア発掘調査報告会報告集』日本西アジア考古学会 08.3.16.</p>
------	---

(様式2)

自己点検評価調書

No. 2206

1. 定性的評価

観 点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判 定	A	A	A	A	A	
備考						

2. 定量的評価

観 点	招へい者数	職員派遣数	報告書作成数	発表件数	ワークショップ開催	
判 定	A	A	A	A	A	
備考						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	アフガニスタンやイラクにおいては治安等の問題があり、職員の派遣が難しいといった様々な問題が存在するものの、招へいして研修を実施する（イラク）など、事態に柔軟に対応しながら、全体的に計画に沿って事業が実施されており、かつ、成果も上がっていることから、Aと判断した。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	治安情勢等の様々な問題に配慮しながら、全体としては計画に沿って事業が実施されていることから、「順調」と判断した。

(様式 1)

No. 2207

業務実績書

中期計画の項目 (I 5 (2))	諸外国に於ける文化財の保存・修復に関する技術移転、文化財保存担当者や保存・修復専門家などの人材養成に関する支援事業を国内外で実施するとともに、人材養成に必要な教材は教育手法に関して研究開発を行う。
----------------------	--

【事業名称】	諸外国の文化財保存修復専門家養成 (I 5 (2) ア)
--------	------------------------------

【事業概要】	文化遺産の保存修復を実施するためには、経験豊かな修復専門家の関与が必要不可欠である。しかし紛争や治安の不安定な状態が長期間続いた国々では、文化遺産を保存・修復する人材が決定的に不足しており、その養成が緊急的課題になっている。そのため諸外国における専門家の研修を実施する際の教材として使用することを目的とし、「水浸木材」をテーマにした DVD 映像と、過去の保存・修復や研究事例の極端に少ない「樺皮仏典文書」をテーマにしたテキスト及びDVD映像を作成した。
--------	---

【担当部課】	文化遺産国際協力センター	【事業責任者】	センター長 清水真一
【スタッフ】	山内和也、谷口陽子、宇野朋子、大場詩乃子、坂本雅美、広野幸（以上、文化遺産国際協力センター）		

【年度実績概要】	諸外国における専門家の研修を実施する際の教材として使用することを目的とした。  「水浸木材の修復」は遺跡などのから出土した木質遺物の変形を防止し、形状を保ちながら後世に残すための保存修復処置の方法を DVD15 分程度にまとめた。実際の修復現場で行われている一般的な複数の手法と手順を映像としてまとめたものを英語と日本語のナレーションで作成した。研修対象者に説明し、英語・日本語の言語での説明以外に、映像として残すことで水浸木材の修復処置方法を的確に分かりやすく説明することが可能になり、利用しやすくなった。  「Conservation Manual for Birch Bark Fragments」は過去の保存・修復や研究事例の極端に少ない「樺皮仏典文書の修復」をテーマにテキスト及びDVD映像を作成した。「樺皮文書」は西アジア近辺で発見され、諸外国で保存・修復、また保管管理されているケースがあるが、修復処置方法や劣化の機構は解明されていない部分が多い。住友財団助成金によりアフガニスタン・バーミヤーン出土の樺皮文書断片の保存・修復処置を行ったことから、断片の調査記録の方法、最小限の介入を目的とした修復方法や処置と暫定的な保管方法などを事例的に説明することを目的とした。このDVDではバーミヤーン出土の樹皮仏典文書の出土状況を導入として「記録方法」「修復処置のためのテスト」「マウント方法」などの解説を動画で説明することで作業内容を分かりやすく説明することを目的とした。英語のナレーションを入れ、14 分ほどの映像でまとめた。  「Conservation Manual for Birch Bark Fragments」のテキストは、DVD映像だけでは含められなかった詳細等を記述し、また適度に簡潔にすることで参照しやすくなった。参考文献や使用した道具類の入手先を掲載することで参考にしやすくなったと考える。修復事例や研究報告が未だ少ない樺皮文書の修復処置事例として、文化財の保存修復に関わる専門家の研修や同様の文化財を取り扱う担当者への解説として効率的な活用が可能となった。
【実績値】	①② DVD編集 各1巻（全2巻） ③ テキスト作成 1冊

【備考】	①文化遺産国際協力センター編集 「水浸木材の保存」 DVD ②文化遺産国際協力センター編集 「Conservation Manual for Birch Bark Fragments」 DVD ③文化遺産国際協力センター編集 「Conservation Manual for Birch Bark Fragments」 テキスト
------	--

(様式2)

自己点検評価調書

No. 2207

1. 定性的評価

観 点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判 定	A	A	A	A	A	
備考						

2. 定量的評価

観 点	DVD作整数	テキスト作成数				
判 定	A	A				
備考						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	計画通りにDVDとテキスト作成が出来たので、Aと判断した。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	樺皮仏典文書のDVDとテキストが完成し、当初の計画通り順調に進行している。次年度もそれぞれのテーマごとに引き続き製作していく予定である。

（様式1）

No. 2208

業務実績書

中期計画の項目 (I 5 (2))	諸外国における文化財の保存・修復に関する技術移転を積極的に進める。また、アジア諸国の文化財保護担当者や保存・修復専門家などの人材養成に関する支援事業を国内外で実施するとともに、人材養成に必要な教材や教育手法に関する研究開発を行う。
----------------------	---

【事業名称】	国際協力機構、ユネスコアジア文化センター等が実施する研修への協力。(I 5 (2)イ)
--------	---

【事業概要】 ユネスコアジア文化センター（ACCU）および国際協力機構（JICA）などでは、例年、アジア・太平洋地域諸国の文化遺産保護専門家育成のためのいくつかの研修を計画しており、当研究所はそれらの協力依頼に積極的に対応しているところである。研修は、いうまでもなく、文化遺産に関する、きわめて専門的な内容におよび、当研究所の各専門領域の研究員が講義に参画している。
--

【担当部課】	企画調整部・文化遺産部・都城発掘調査部	【事業責任者】	企画調整部長 岡村道雄
--------	---------------------	---------	-------------

【スタッフ】 安田龍太郎、光谷拓実、窪寺茂、杉山洋、島田敏男、清水重敦、大林潤、井上和人
---

【年度実績概要】 ユネスコアジア文化センター（ACCU）が実施した研修への協力 ①「文化遺産の保護に関する研修2007—木造建造物の保存と修復」（長期集団研修14名）（9/18～10/19） ②「ベトナム ドンラム村保存事業に伴う専門家育成研修（個人研修3名）（8/28～9/27） ③「文化遺産の保護に資する研修2007」（個人研修2名）（11/26～12/21）  ①は木造文化財の保存と修復に係わるさまざまな技術や考え方を研修したもの。研修への参加者はアジア・太平洋地域諸国の若い世代の専門家であった。 ②の研修参加者は、近年、日越協力事業として成果をあげつつある、ベトナム国ハタイ省ドンラム村の伝統的村落保存事業に関わる現地の専門家を育成するために実施した研修。 ③の研修参加者2名はモルジブ国立言語・歴史研究センターに所属している。博物館における資料保管法、収蔵システム、管理システム、展示方法などの諸課題につき、必要な知識・技術を習得することによって、今後モルジブ国の博物館運営や文化遺産に寄与することを目的としたものであった。
--

【実績値】 研修生数 ① 14名 ② 3名 ③ 2名
--

【備考】
------

(様式2)

自己点検評価調書

No. 2208

1. 定性的評価

観 点	適時性	効率性	継続性			
判 定	A	A	A			
備考						

2. 定量的評価

観 点						
判 定						
備考						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	ACCUの期待する要求に充分に応じることができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	当研究所の保有する諸専門知識、研究員はACCU等の希望する文化遺産保護人材育成事業に着実に貢献しつつあるので、今後とも全面的に協力していくことが可能である。